
長い夜に

水花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

長い夜に

【Nコード】

N9705S

【作者名】

水花

【あらすじ】

ある満月の夜に異界から青年が現れました。たまたまその場に居合わせてしまった魔法屋シエルの放蕩店主矢萩はその青年を連れて帰ります。瓶詰め魔法を売ってくれと頼む青年にはいったい何があったのでしょうか。

サイトより転載作品。

時間はけして戻らない。

鏡のような水面がゆらりと揺れた。

空で輝く丸い月が、水面のうえで波打つように形を変える。

風も吹いていないのに、と不思議に思っ
て池を覗き込んだ、その時。

見えない腕に引かれたように、水の中へと落ちてしまった。

かしや・・・ん。

鏡が砕けるような水しぶきがあがり・・・次第に水面はもとの滑らかさを取り戻す。

何も、変わったことなど、なかったように。

“魔法屋シエル”の放浪店主矢萩は、鼻唄まじりに歩いていた。月の明るい夜だった。地面に濃い影が落ちるほどの。夏はそろそろ行こうとしていて、気の早い秋の虫の音が草むらから聞こえていた。

矢萩は仕入れの帰り道だった。途中立ち寄った居酒屋の“青猫亭”で軽く呑んだせいで、浮かれたい気分ですりも軽い。首の後ろで無造作に束ねられた白髪が、獣の尻尾のように、ひよこひよこ
と揺れている。

仕入れた品物が掘り出し物だったせいもあるし、趣味のお茶もとても良いものが手に入ったせいもある。

もっとも、孫の伊吹に言わせると、「仕入れの方がついででしょ」

と言つことになるが。

さわさわと梢や丈高い草を揺らす風は涼しく、少し火照つた頬には気持ちよかつたので、矢萩は、

「あと少して店に着くね〜ふう、よっこいしょ」

よいせと背中に背負つた荷物を背負いなおすと、（この荷物、実のところ店用に仕入れた品ではなく、趣味のお茶っ葉である。仕入れた品は一足先に配送してもらっていた）うきうきと独り言の続きを言つた。

「ふふふ、いいお茶も手に入ったし〜。うさぎと、あと伊吹にもお茶につきあつてもらわなきゃね！」

伊吹が聞けば、確定事項ですかじいさま・・・非常に遠慮したいと抗議の声が上がることに請け合ひだが、矢萩はこれっぽっちも氣付いていなかった。自分の楽しい事は、相手にとつても楽しいのだと疑わない。

「あと、梢くんのところにもお裾分けしないとね〜いつも美味しいお茶淹れてもらつてるし」

街の西の端で、喫茶店“カレント”を営んでいるマスターの、穏やかな笑顔が浮かぶ。そしてお裾分けのついでに、この茶葉でお茶をいれてもらおうと目論んでいた。

お茶好きの割には、自分でお茶を淹れるのは、てんで下手な矢萩なのである。

いい気分で、てくてくと歩いている時。目の端で、何かがきらきらと光つた。

「あれえ？」

何の光だろう、ここには灯りなんかはないのに。足を止め、矢萩はきよるきよると辺りを見回した。すると目の前の空間が、ゆらりと水のように揺れ・・・周りの風景がぐにやりと歪む。虫の声もぴたりと止んでしまった。

すぐに凪いだ水面のようになった。

鏡のような水面は、鮮明に像を映し取る。しかし、そこに映つて

いるのは、矢萩ではなかった。

短髪で、眼鏡をかけた・・・見知らぬ青年だった。

「あれえ？」

再びゆらりと空間が揺れた。映った像は消えることなく、なんとこちら側・・・矢萩の方へと現れたのだ・・・実体をともなつて。

青年は、乾いて白っぽくなった道へ倒れこんだ。そこで矢萩は我に返り、慌てて青年に近づく。

「きみ、大丈夫かい？」

体を揺すってみても、青年は目を開けなかった。怪我をしている様子はないし、呼吸も苦しげなものではないが、どうしたものかと矢萩は首を傾げる。

「おや・・・ああ、このお人のものかな」

かつんと何かを蹴った矢萩が地面を見ると、縁のない眼鏡が転がっている。おそらくこの青年のものだろうと、胸ポケットに仕舞った。

ふう、と矢萩はため息をついた。いつの間にか戻ってきた虫の声だが、とても賑やかに聞こえてきた。

「どうしようかなあ？」

のんびりと、しかし、どこか楽しげなそれを、聞いたのは高みから見下ろす、明るい月だけだった。

ひとの気配。頭の上で交わされる会話。湯気。お茶の香り。一つずつ、感覚が鮮明になってくる。

眠っていたのだろうか。いや・・・眠った記憶はないんだけど。

目を開けてみても、視界はぼんやりとして頼りなかった。目を擦ってみても、視界は変わらない。

ああ、眼鏡をかけていないからだ。

体を起こして、ぼんやりしていると、横からはいどうぞと眼鏡を差し出された。

これは誰だっけとか、ここは何処だったかとか、疑問がすこしばかり頭を掠めたけど、まずは周りを見てからだ眼鏡をかけて見回してみると・・・案の定知らない場所、知らない人の間に自分はいた。おまけに。

「伊吹、お茶は入ったかい。お客さんが目を覚ましたよ」

と、平坦な声で言ったのが、丸い眼鏡をかけたうさぎ・・・比喻でなく、ふかふかの白い毛を持つ兎・・・だったものだから、ぎよっとして仰け反ってしまった。そういえば、差し出された手が、やけに白いと思ったんだ。

静かに硬直してしまった青年を、うさぎはおや、と目を細めて見下ろしている。

青年が無意識に握りしめた毛布は柔らかく暖かく、その感触がこれが夢ではないことを知らせていた。

どうしようっ。内心焦った青年だったが、それを救ったのは、高い子どもの声だった。

「あ、起きた〜？今お茶持って行くね」

そういえば、さっき目の前のうさぎは、伊吹とか呼んでいたっけ。開け放された扉の向こうから、茶色・・・いや、琥珀色の目の少年がやってきた。手に持ったトレイに、湯気の立つカップをのせている。

「はいどうぞ」

伊吹と呼ばれた少年が、カップを差し出してくれる。躊躇いながらもそれを受け取ると、彼はにっこりと笑った。

「だ〜いじょうぶですよ、そんなに心配しなくても」

困惑して、焦っている青年の内心を見透かすように。え、と目を見開いて青年が伊吹をまじまじと見る。

「あなたが何処から来た人か、僕らにはわからないんですけど、でもちゃんとあなたが元居たところへ帰れるってのは、僕らは知っていますから」

だから、まずはお茶でも飲んで、落ち着いて下さいね。

「そうそう、待ってれば、帰ることができる」

必ずね、とうさぎは言いながら隅の丸テーブルへ行き、分厚い本を広げた。

「僕にもお茶くれるかい」

「はいはい、持ってくるから待ってて」

伊吹はひらりと身を翻し、部屋を出て行く。青年はほっつとため息をついた。

とりあえずわかっているのは、“必ず帰れる”と少年が笑って言ったこと。(その理由はわからないけど)

焦っても仕方がないこと。この二点だろう。

頭をかきながら周りを見回してみると、どうやらここは何かの店のようだった。体を起こせば、自分が寝かされていたのは、ベッドではなくて長椅子だった。

棚が幾つも並び、見た事のあるような日用品らしきもの、薬草やお茶のようなものが雑然と並んでいる。そして、青年が見たことのないようなものも。一体何の店なんだろうと首を傾げた。

伊吹はうさぎにお茶を出したあと、艶のあるカウンターを磨いていた。カウンターの背後には、天井まで届くほどの背の高い飾り棚があつて、そこにも見知らぬ形のもの詰まっている。

自分は一体、何処に来たんだろうと思えば、また不安が湧き上がるので、まずは少年の言ったとおり、お茶を飲んで気を落ち着けることにする。

白いカップの中のお茶は、淡い琥珀色で、飲んでみると紅茶の味がした。それに少しほつとする。

「俺の所にもあるお茶に、味が似ているね」

「ほう、君もお茶が好きかな。ここには珍しいお茶があるから、飲んで帰るといいよ」

青年が言うやいなや、それまで本を読んでいたうさぎが目をきらりと光らせ、そんな事を言ってきた。

「は、はあどうも・・・」

突然友好的な態度になったうさぎに、青年は戸惑う。

「無理に付き合うことないよ、お客さん。この人たちにつきあつたら、お腹たぶたぶになっちゃうよ」

「この人たちつて、もしかしてぼくのことも入ってる？」

「もちろん」

当たり前でしょくと伊吹は後ろを振り返りもせずと言う。カウンターの後ろにも扉があつて、そこから現れたのは、背の半ばを越えるほどの白髪を束ねた・・・年齢不詳の人物だった。

若いようにも、年を取っているようにも見えた。伊吹と同じ、綺麗な琥珀色の瞳をしていた。

彼は青年のそばに来るなり、にやりと笑った。

「お目覚めかね、お客さん」

そして、一呼吸おいて、付け加える。

「ようこそ、我らが世界へ」

月は天高くにあつた。

“魔法屋シエル”の放浪店主、矢萩が青年を“どうにかこうにか”連れ帰ってから、それほど時間は経っていないと言う。お茶を淹れなおして、矢萩と伊吹とうさぎ、そして橘と名乗った青年は、一つのテーブルを囲んでいた。

矢萩は言った。

「何やら、こう、きらきらつと光つたなあと思つたら、あんたが現れたんだよ」

揺すつても目を覚まさないから、どうしようかと思つてね、ここに連れてきたんだと。

それは知らぬこととは言え、ご迷惑をおかけしてと、橘が頭を下げると、

「不可抗力つて奴だから、君が気にする必要は無い」

そっけない口調でうさぎが口を挟んだ。白い毛で覆われた手には、

白いカップ。橋が見た範囲だけでも、すでに4杯目に突入している。確かにコレに付き合えば、茶腹は間違いないだろう。

「そうそう、それにじいさま、無駄に力持ちだからね、きっと橋さん連れて帰るくらい、わけなかつたと思うよ」

「無駄とは、また酷い言い草だねえ・・・」

矢萩はしくしくと泣きまねをしたが、伊吹もうさぎも肩を竦めて相手にしない。

橋は、こんなのにのんきでいいのかなあと思うが、自分にこの状況を説明してくれた人たちが、自分以上にのんびりとしているので、まあいいんだろうと思う。

いつもの道。いつも通る池の傍。風が無い夜で、水面は鏡のように凪いでいた。水面にくつきりと映った月を見ていた。あかるい満月の光が、反射するかのようにならきらきらと光っていた。

と。そこまでが橋が覚えている事だ。そうして気がついたら見知らぬ場所で寝ていて、覗き込んだうさぎに仰天した次第である。

「なあに、そう心配しなくても、月が隠れる頃には帰れるんじゃないかな」いつもそうだから

矢萩は・・・何と、伊吹の祖父だという・・・事も無げに言い、目の前に落ちかかる白髪を煩げに払いのける。

「いつも、とは？」

「お前さんみたいに、何かの拍子で“こちら”に来るお人は結構居てね、その人らをぼくたちは“お客人”って呼んでいるんだ」

“お客人”あるいは“お客人”。そう彼らが自分の事を呼んだ意味がわかった。それは、別の世界からの来訪者の呼び名だったのだ。その“お客人”がどれくらいの頻度で現れるのかと問えば、「まあ、珍しくない程度には」との返答がある。

「あまり長く居ないから、“お客人”ですか」

「そう。長くて一日。短いと数時間くらいで元の世界へ帰る」

惜しいなとうさぎが呟くが、橋には何の事やらわからない。伊吹

がこつそり耳打ちしてきた。多分、異界のお茶の事をじっくり聞きたいんだよと。丸眼鏡の奥の目を光らせ、うさぎはこほんと咳払いをした。

「ともあれ・・・これは君にとっては夢のようなものだ」と。

感覚もある、切れば血も流れる・・・夢のような現実だ。けれど、自分が“本来生きる場所”ではないから、“夢のよう”に感じるのかもかもしれないと。

「たとえば」

手にしたカップを覗き込みながら、うさぎは言う。

「君は自分の居る世界を何と呼ぶ？」

橘は咄嗟に答えられなかった。国や地域を表す言葉はある。けれど、世界そのものを表す言葉は、知らなかった。

「知らないだろう？唯一のものを、わざわざ名前を付けて区別する必要はないからね」

ちなみに。うさぎは付け加えた。

「僕も、僕が住むこの世界を表す言葉を知らない・・・誰も、知らない。だから・・・世界の“名前”は二つしかないんだ。“自分の世界”と“異界”っていうね」

「あるいは」

黙ってお茶を飲んでいた矢萩が口を挟んだ。

「この世界と、あまたの異界っていう区別かな」

「そうか・・・俺の居る所も、あなたたちから見ると“異界”ですね」

立場が反対なら、矢萩たちが“お客人”だ。

窓辺に置いたランプの灯が、風に揺れた。影が大きく揺らめいて、店内の床や壁に複雑な模様を描く。窓の外からは月の光が差し込んでくる。

綺麗だなと、テーブルに頬杖をついて橘はぼんやりと思った。

淡い光、冴えた光は、青い海の底に居るようだ。

鳴く虫の声は、打ち寄せる波の音か。静かな静かな深海の底。

仕事柄というべきか、つい連想的にイメージを膨らませていると、不意に伊吹から声をかけられた。

「ねえ、橘さんは何をやってる人？」

「え・・・ああ、絵を描いているよ」

「そうなんだ。どんな絵？」

「うーん、そうだね・・・お話の挿絵が多いかなあ・・・」

「へえ、そうなんだ」

見てみたいなど言う伊吹に、見てもらえる方法があればいいんだけどねと答えて、今度は橘から尋ねてみる。

いささか疑問に思っていたことを。

「ここは“魔法屋”って聞いたけど、一体どんなものを売っているの？」

この質問に伊吹は途端に渋い顔をし、矢萩とうさぎは逆に、にやにやと笑った。橘がしばらく待つてみても、誰も何も答ええない。

首を傾げていると、伊吹から「何を売っているように見える？」と問いで返された。

はてと橘はもう一度店の中を見回した。日用品らしきもの、お茶、薬草、雑貨・・・。

「何でも売ってそう・・・」

呟いた橘に、伊吹は年に似合わない深いため息をついた。

「そう、この店ってば、ほとんどご近所の何でも屋だよ。“魔法屋”って名前はついてるけどね。まあ魔法も売っているから、看板に偽りありとまでは言わないけど」

何でも屋。ああそれなら納得したと橘は思うが、また首を傾げる。そもそも、“魔法”を“売る”という言い回しじたいが、橘には馴染みがないのだ。

「魔法って、売り買いできるものなのか？」

「出来るよ。ほら、これ売るの」

伊吹が見せたのは、綺麗な色の硝子珠だった。それは封印紙が貼られた瓶に入っている。

「瓶詰魔法って言うてね、魔法使いが、特定効力のある魔法を閉じ込めたものなんだ」

「ふうん……」

伊吹から瓶を受け取り、物珍しげに橋は瓶をひっくり返したり、灯にかざしてみたりする。

魔法がお伽話の世界に居る橋にとって、それが“瓶詰”で“気軽に”買える世界など、まさに“夢のよう”だ。

「お前さんの世界には、魔法はないのかい？」

「ない、ですね、日常的には」

「と、言うて」うさぎが眼鏡の奥の目を光らせる。

「俺が知らないだけで、世界の何処かにはあるのかもしれない」

そう、もしどこかに魔法があつて。

それを使うことが出来るのなら……心の奥底で、望んでいたことが。

「ここには……時を戻す魔法なんて、ありますか」

『もういい加減にして』

怒りも限度を越えると、氷のように冷えるのかもしれない。そう感じさせるような、冷たい……斬りつけるような声が彼女の口から零れた。

『私の言ったこと、ちゃんと聞いてくれてるの？私のこと、見えてるの？……あなたにとって、私は必要なの？』

じっと見つめる彼女の瞳。

『そう……何も言ってくれないのね。それが、答えなのね』

感情をそのまま映す彼女の瞳。まるで猫の瞳のようだと言えば、笑っていた。

背を向けた彼女に、何か言わなければと思った。

彼女が望んでいるだろう、言葉を。そうしなければ、彼女は二度

と戻らないことが分かっていたから。

けれど、何も言わなかった。彼女の目が曇り、諦めの色をのせ・
・そして背中を向けられても。

目の前の事に気を取られて、彼女を少し疎ましくさえ思っていたから。

本当に大事な事は何だったのか。

大事なことを、そうと気付く前になくしてしまった。

彼女の顔がもう思い出せない。覚えているのは、最後に見た、吹雪の夜のような・・冷たい色の瞳だけ。

その色が、心に焼き付いて消すことが出来ない。

もしも時を戻せるのなら。

あの時から・・やり直したいのに。

言えなかった・・言うべきだった言葉を、伝えたいのに。

ぱりん、しゃりん・・。

耳元で、硝子の碎けるような音を聞いた。はっと橘は目を瞪る。眠っていたわけではない。

けれど、先程まで見えていたものは・・。

「お前さんの戻りたかった時間へは、行けたかね」

床に転がった珠を拾い上げ、矢萩は尋ねた。珠はどこも欠けていない。ならばさつき橘が聞いた音は何だったのだろう。透明だったはずの珠は白く曇っていた。

「あまり、いい記憶ではなさそうだね」

そうも言われて、橘は苦笑を返した。

時間を戻す方法はないかと尋ねた橘に、「望みの時間へ戻る魔法はある」と矢萩は答えた。だがなあ・・と腕組みをして難しい顔をする。けれど、しばらくして、まあいいかと一人頷いて席を立つ。

そしてカウンターの背後の飾り棚を開け、一つの硝子珠を取り出した。
てきた。

それを橘の手のひらにのせた。

拳大の珠は何処までも透明で、月の光をきらりとはじいた。

「これが“時の魔法”の力がこめられた珠。戻りたい時間でもあるのかい？」

その言葉に、迷わず頷いた橘に、あつさりと矢萩は言った。

「そう・・・なら、行っておいで。君の望むままに」

お代はあとで、ちゃんと貰うからね？目を細めて言った矢萩に、もう一度頷いて、橘は“望んだ時間”に“戻った”のだった。

「やっぱり、時を戻すことは出来ないんですね」

曇ってしまった硝子の珠を、手の中で転がしながら、橘はちいさく笑う。

透明だった珠が曇ったのは、こめられた力を使い果たしたからだとうさぎが言った。

「時は流れるもの。同じ流れは二度と来ない。過ぎ去った時を垣間見る事は出来ても、その流れを変えることは出来ない」

それから、とうさぎは言葉を継いだ。“時の魔法”はそもそも、過ぎた昔を懐かしむためのものだった。けれど。

「けれど、君のように、過ぎた時間をやり直そうと、“時の魔法”を使う者は後を絶たないんだ・・・変えられないとわかっていても」

万が一の望みをかけて。

だから、矢萩は「君の望むままに」と言ったのだらう。過ぎた時は変えられない。掴んだと思ってても、手のひらから零れる水のように。

「あきらめがついたかい」

うさぎの声はそっけない。

「ええ・・・ええ、そうですね」

苦笑して答えながら、橘はふと疑問に思った。自分の“過去”が、矢萩たちにも見えていたのだろうか。そう問うと、

「ぼくたちは何も見てないけどね・・・ただ、“時の魔法”を買うのは、過去に悔いのある者と相場が決まっているんでね」

と矢萩は肩を竦めて答える。お見通しのうえで、あえて“時の魔法”を渡してくれた、その意図がもう橘にもわかっている。だから、
「ありがとうございます」
と礼を言うのと、

「礼を言われるほどの事はしてないさ」と

白髪をかきまわしながら矢萩は言った。そして、少しうきうきと楽しそうに言う。

「さて、お代は何で払ってもらおうかな」

「つて、俺何も持っていませんよっ」

「大丈夫、あちらから送ってもらおう方法はある」

にんまり笑いながら、矢萩はうさぎにも相談を持ちかけた。

「何がいいかな〜やつぱり〜」

「やはり、アレがいいだろう」

「じいさま、僕には聞いてくれないわけ？」

「ぼくのお客だから、ぼくの好きなもので払ってもらっよ」

「それって・・・」

やれやれ、と伊吹は呆れた顔をした。何を言われるやらと身構えた橘に、にやりと矢萩は笑った。

「お代は美味しい紅茶でいいぞ。向こうに着いたら送ってくれや」

月が山の端に沈む頃。弱まった月の光が、何かに反射してきらきらと光った。おう、そろそろ帰る頃合のようだなと矢萩が呟いた。目の前の空間が歪んだかと思うと、よく磨いた鏡のようになったのだ。お前さんはそこから現れたよ、多分そこから帰れるさと矢萩は言った。鏡のようになった空間を通り抜けると、橘はいつも通る、

あの池のそばに佇んでいた。こちらでも、白い月が西の空に沈もうとしていた。

長い夢のような一夜は終わったのだ。

忘れられなかった後悔を道連れにして。

再び月はめぐり、満月の夜。

風はなく、池は鏡のように凧いでいた。橘があの世界へと行った日のように。

その水面に向かって、橘は約束の“お代”を投げ入れる。あちらの世界の人たちへと届くと信じて。

水面の月が粉々に砕け、元に戻る、ほんの僅かの中に。音も立てず、“お代”は水の中へ沈んでいった。

「こんちわ〜、橘、依頼してた絵、出来たか〜？」

ある日の午後。仕事として依頼されていたイラストを、友人でもある編集者が受け取りに来た。出来ているよと答えながら、いつものように仕事場へと通す。丁度仕事が一段落したところだったので休憩しようと自分の分もコーヒーを入れて仕事場へと戻る。先に仕事場へ入っていた友人は、床や机に散らばる描きかけの絵を見ていた。

「はいコーヒー、と、こっちが依頼の絵」

「はい確かに受け取りました、と。へえ・・・いつもとちょっと違う感じだけど、ナンかいいい感じ」

そう言っつて、友人は汚したりしないようにと絵を離れた所に置いた。そしてコーヒーを啜りながら、「それでこっちは何、どこかの依頼？」

友人が指したのは、机の上に乗っている、まだ絵の具も乾いてい

ない絵だった。

青い、海の底にいるような光の中、雑多なもので溢れかえった何かの店。

テーブルを囲む人たち。お茶会でもしているのか、テーブルの上には茶器。

笑い声さえ聞こえてきそうな、穏やかで暖かい絵だった。

「いや、依頼じゃないよ。描いてみたくてさ」

割と気に入った出来になったよと言った橘と、絵を見比べながら、友人は尋ねた。

「タイトルとか、決めてんの？」

「うん・・・そうだね・・・」

カップを手に、橘は小さく笑った。たとえば。

「長い夜に」

明るい月に誘われてか、虫の声が賑やかだった。けれど。ふと、それが途切れた。

「おや」

カップをソーサーに戻し、矢萩は呟く。すると目の前の空間から、水面を潜り抜けるようにして、綺麗にラッピングされた包みが現れた。それはぼすんと矢萩の手の中におさまった。それと同時に、もどってきた虫の声。

「約束の“お代”だね、どれどれ」

矢萩はいそいそと包みを解く。出てきたのは、幾つかの、色々な種類の紅茶の缶。それと、もうひとつ。

「おや、これはまた、嬉しいものをくれたね」

店内で、一番いい場所に飾ろう。思わず口元に笑みを浮かべ、矢萩は伊吹とうさぎを呼んだ。

「異界から“お代”が届いたよ。どれ、お茶にしよう」

“お代”として入れられていたもの。「長い夜のお礼に」と裏に短く書かれてあったそれは。

青い海の底のような・・・月の光に照らされた、“シエル”の店内。

テーブルを囲む、矢萩、伊吹、うさぎ。そして、橘。

テーブルの上には茶器。笑い声が聞こえてきそうな、優しい絵だった。

そして・・・これは橘だけが知っていること。

橘の手元にある同じ絵と、たった一つの違いがある。

それは、彼らに贈った絵にだけ、橘自身を描いたことだった。

楽しかった、夢のような長い夜の礼として。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9705s/>

長い夜に

2011年7月10日03時55分発行